

特集 1 / 『公共研究』第 20 巻刊行記念

## COE プログラム参画の若手研究者たちによる座談会

駒沢大学経済学部教授

浅田 進史

中部大学経営情報学部准教授

伊藤 佳世

和光大学現代人間学部非常勤講師

角田 季美枝

千葉大学大学院社会科学研究院特任研究員

宮崎 文彦

巻頭言でも広井良典先生が言及されたように、本『公共研究』が創刊されたのは、千葉大学において採択された 21 世紀 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」（2004－2008 年度の 5 年プロジェクト）における活動の一環としてでした。このプロジェクトは、「公共哲学」「国際公共比較」「公共政策」という 3 つの部門から構成され、それぞれをサブ・リーダーが担当するとともに、プロジェクトを担う若手研究員（「COE フェロー」という肩書）が採用され、プロジェクトの推進に携わりました。

今回、20 巻刊行にあたり、当時の各部門の COE フェロー（浅田：国際公共比較、伊藤：公共政策、宮崎：公共哲学）ならびに本『公共研究』の編集担当（角田）にお集まりいただき、当時を振り返りながら、学問分野を越えた共働や「公共研究」「公共学」と自身の研究などについて語っていただきました。

（宮崎文彦）

**宮崎文彦（公共哲学部門：司会）**：本日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。今回このような企画を立てましたのは、私たちが

関わっておりました 21 世紀 COE プロジェクトプログラムの成果物である『公共研究』が第 20 巻を迎えることになり、今回、巻頭言をお寄せいただくことになったプロジェクト・リーダーの広井先生にご相談させていただいたなかで単なる回顧だけではいけないのでは、ということもありましてこのような座談会を考えた次第です。

本プロジェクトで COE フェローや技術補佐員として従事した若手研究者は、延でいうと 10 名近くにもなり全員集まればいちばんいいわけですが、日程の調整も大変になりますので、今回は各部門から一人ずつということで、公共政策部門からは伊藤さん、国際公共比較部門からは浅田さんにそれぞれお越しいただきました。公共哲学からもひとりお呼びしても良かったのですが、私自身が公共哲学のメンバーなので私が兼任し、あともうひとかた、『公共研究』の座談会ということで、この雑誌の土台を築かれた当時の編集担当であられる角田さんに来ていただかないわけにはいかないということで、お忙しい中お集まりいただきました次第です。

この座談会では、ぜひ単なる回顧ではなく、この COE プログラムを経て、特に分野横断的なことをやってきましたので、ご自身の研究との関係や、その後のキャリアにどのようなかたちで影響したのかというようなことを、プロジェクトの前とプロジェクトに関わっているとき、それからプロジェクトが終わった後という 3 つの段階に分けてそれぞれお話をしていく中で、質疑応答なども挟みながら進めていくと面白くなるのではないかと考えております。

では早速、それぞれ現職のことを含めた自己紹介を兼ねて、まずはどのような経緯であのプロジェクトに関わるようになったのかということをお話いただければよいかと思います。まずは伊藤さんからお願いします。

#### 公共研究プロジェクトに参画するきっかけ

**伊藤佳世（公共政策部門）：**私は公共政策の方の分野で、元々は環境や経済の分野ですが、公共機関の環境マネジメントの対策を研究しておりました。それで政策と元々の環境分野でこちらのプロジェクトで環境政策と環境マネジメント

の両方を実践するというかたちで取り組んできました。現職としては中部大学にありまして、同じく環境マネジメントを続けております。公共政策は経済政策に移行して、産業政策特に標準化のところを中心に研究しています。今日はエコプロで学生と一緒に出展しています。ビッグサイトにみなさんお集まりいただきました。

宮崎：ちなみに倉阪秀史先生(公共政策部門、サブリーダー)とのご関係はどのようなものですか。



伊藤佳世

伊藤：倉阪先生とは、千葉大学のISOの取り組みのところで、ISOにご協力くださいということで、公共研究とISO学生委員会の支援という両方で関わってきました。

宮崎：伊藤さんは千葉大学の大学院のご出身でしたか？

伊藤：千葉大学の大学院ではありません。九州大学です。こちらのISOと環境政策に関心があり、お話をいただきまして、ぜひということで参画させていただきました。

宮崎：なるほど、ありがとうございます。続きまして浅田さんお願いします。

浅田進史(国際公共比較部門)：当時千葉大学のこのプロジェクトに関わる時には、私は博士課程の大学院生でちょうど2年弱のドイツ・ベルリン自由大学での留学から帰ってきた頃でした。このプロジェクトが始まる時に国際公共比較部門を作るということで、当時、プロジェクト・リーダーとなったのが雨宮昭彦先生です。雨宮先生の専門はドイツ経済史で、元々はドイツの中間層の研究をされていましたが、このプロジェクトが始まる頃に東京大学出版会から『競争秩序のポリティックス』(2005年)という本を出されました。ちょうど新自由主義という問題とそれから福祉社会の在り方をどうしていくかという問題関心が強かった時代だったと考えています。その関心と併せて、雨宮先生がおそらく経済史や歴史の立場からこのプロジェクトに関わるということだったと思います。雨宮先生と私の関係については、私は主にドイツと東アジアの関係



浅田進史

を植民地主義的な視点で 19 世紀末から研究していましたが、植民地主義・帝国主義と自由主義の関係がホットなテーマになっていた時期で、私もそのようなところに関心がありました。主査の指導教員ではありませんでしたが、雨宮先生と研究室で直接お会いして、ちょうど博士論文を書く段階のところで、COE フェローのお誘いをいただき、このプロジェクトに参加しました。

宮崎：なるほど、ありがとうございます。順番的には私が公共哲学部門の人間なので話をさせていただきますと、公共哲学部門は一ノ瀬佳也さん、吉永明弘さん、このおふたは千葉大学大学院出身の方ですが、私はその意味では全く別で、伊藤さんと同じようなかたちで、私は当時東京工業大学の大学院に在籍をしていました。

このプロジェクトとのご縁は、後に東京大学出版会から 20 巻シリーズで刊行されることになる『シリーズ 公共哲学』の基になる研究会です。この研究会に私の当時の指導教官が参加していたのですが、ちょうど私が博士課程に進学した 2000 年頃に行われていました。公共性を研究テーマにしていたことから、その研究会の聴講を許されたのですが、若手からも発言をと促され、第 4 巻『欧米における公と私』にも私の発言が載っています。もともと政治学を専門としていたこともあり小林正弥先生からお声がけいただき、博士課程のときから小林正弥先生のゼミには参加しておりました。私も半分外部の人間のようなところがありまして、今度こういうプロジェクトが始まるのだけれど来ないかと言われ、ちょうど私は博士課程の 3 年目くらいで博士論文がまだ仕上がっていませんでしたが、あともう少しというところでしたので、ぜひお願いしますというかたちで入らせていただいたのが私の経緯です。その意味ではみんな単なる千葉大学の大学院生というだけでなく、伊藤さんや私のように外部からも入ってきて、多彩なスタッフが揃っていたのではないかということができ

ると思います。では、角田さんお願いします。

**角田季美枝**（『公共研究』編集担当）：こんにちは。私は倉阪先生との出会いがいちばんのきっかけで、元々はフリーランスライターの際に倉阪先生に取材をしていました。その時はフリーランスでやっていたのですが、きちんと勉強したいという思いがあり、先生の研究室に入りたいと相談したところ、「いいよ」と言っていたので、社会人として大学院に入院し、倉阪研究室で修士論文と博士論文を書きました。このCOEプロジェクトにはどのように誘われたかと言いますと、「角田さん編集の経験あるよね、ぜひやりましょう」というような感じで、雑誌はやはり作らなくてはいけなけれども、誰もそのような経験がないので入ってくださいという流れでした。だから初めは研究員ではなく技術補佐員で入りました。それから博士課程に進みましたので、リサーチアシスタントとして参画してこの雑誌を作っていました。

**宮崎**：技術補佐員だったのが先でしたか。

**角田**：そうです。大学院にいなから2004年7月から技術補佐員、2007年4月からリサーチアシスタントになりました。この雑誌のデザインやレイアウト、投稿規定、執筆要領など、やはり図書館に入りたいということがありましたので、ISBNをどうやって取得するのかとか、そういうところから仕事が始まりました。ですので、研究というよりは編集作業から関わりました。

### 公共研究——分野を越えて

**宮崎**：みなさま、ありがとうございます。このようなメンバーが集まりまして、それぞれ政策、歴史、哲学というかたちで元々の土壌が全然違うようなところだったものですから、いろいろと大変な部分もあったかと思います。プロジェクトが始まってからいろいろな交流もありましたし、お互いに研究会に参加したりコミュニケーションを取る機会も多くありました。その分野が違うことでのいわゆるマナーのようなこと、ここで言うマナーというのは「守らなくてはいけないこと」というよりは、習慣のようなものもだいぶ異なっていたのではないかとも思います。

先ほど編集規約の執筆要領の話がありましたが、実はあのベースを作ったのは私なのですが、浅田さんは「これは何だ」と憤慨されていたという話を耳にしまして。それぞれの分野によってやり方が違うので、随分悩みました。哲学の分野でこのようなことをしているということではなく折衷的に作ったので、かなり問題も多かったと思います。一方で、このような執筆要領のようなものは何かひとつの決められたやり方があれば良いのではということなので、そのままにさせて頂きました。

**角田**：学問の専門領域によって書誌情報の書き方が全然違うので、専門家として使っている書き方を逆に変えられないというようなこともあり、その場合は論文の中で統一すればよいという感じでやらせていただいたというところがありました。執筆要領は本当に大変でした。

**浅田**：現在私は経済学部にはいますが、経済学部の中でもやはり経済史系と、数量的な統計分野やミクロ・マクロ経済学の分野とは全然違いますので、所属大学の『駒沢大学経済学論集』も基本的に論文ごとの統一になっていて、雑誌として統一されていません。

**宮崎**：そうなっているんですね。伊藤さんも経済学がご専門ですが。

**伊藤**：そうですね、分野によって違いがある中、どの分野でも書けるように、工夫されているのだろうと思っていました。執筆要領のところには私は携わっていないので、使わせていただく方の立場でした。大変だっただろうと思います。

**角田**：自分の属する専門の書誌情報の書き方が分かっていると評価されるケースもあるので、それは本当に配慮をしなければいけないところでした。

**宮崎**：さてでは、それぞれ分野が違うなかで、もう少し研究の中身として「こんなことがおもしろかった」とか、自分では気づかなかった気づきであるとかあるいは、このプロジェクトが始まってから自分の研究に影響があったようなことが何かあれば、どなたからでもお話いただければと思います。

**角田**：私は環境政策が専門だったのですが、環境と福祉の統合ということで、医療の話や哲学の話などいろいろと分野を超えて、どのように持続可能な社会にしていこうかというところはすごくよい経験でした。

**伊藤**：その後、今の仕事で企業向けに学術指導などを行っていますが、やはりSDGsの分野のところで、たとえば介護系の支援がしたいが何かできないかというときに、千葉大での経験が活きます。私は環境系ですが、オファーを頂いたときに、実はその分野も少しだけわかりますということで企業の方を支援したことがあり、プロジェクトでの経験を活かせたと思っています。非常に多角的な視点で物事を捉えることができましたので、それはすごくよい経験でした。

**宮崎**：環境は特に分野を超えて研究でもそうですし、実際の環境問題への取り組みも分野を超えて取り組まなくてはいけない分野ですから、まさにその意味ではふさわしいのではないかと思います。

**浅田**：私はやはり自分自身の研究活動にとって大きな影響を受けたのは、研究活動そのものにおける実践的な部分です。

私たちが入ったときに公共研究センターで基礎となっていた研究活動として、対話研究会があり、そこで連続的に講演や人を呼んで議論を進めていくという取り組みがありました。その中で私が『公共研究』に寄稿することになった、たとえば「デヴィット・タカーチの『生物多様性という名の革命』を読む」という中の報告があります（本誌第3巻第4号収録）。これは公共哲学部門と公共政策部門のジョイント研究会だったわけですが、私の専門である歴史系分野の研究会では、いわゆる学問的な研究会という性格が強かったのに対して、対話研究会はより実践的な活動と組み合わせられ、また研究会そのものがそのような場としてやっていくというものであり、私にとってはかなり新鮮な経験でした。

当時の私たちの国際公共比較部門では、雨宮先生が現状や政策の側から出していく提起を歴史の過去から見る視点の中でその概念をより鍛えていくということを述べていたのですが、それは重要な視点だと思いつつも、私は他の2つの部門のより実践的な研究会にも参加しました。やはりそれは先ほど伊藤さんが言ったように、強制的にいろいろなものを知るという経験となりました。

現在、私が大学で、学部1年生向けに新生セミナーのようなことをやるときに、題材そのものは経済史的なことですが、その題材が及ぼす社会的意味やそういった問題を取り上げるときに、やはり公共哲学部門や、公共政策部門の

対話研究会に参加した経験があったからこそ、実感を持って語れるというところがありまして、それは非常に今の大学教育の場では役立っています。

もうひとつは、やはり研究成果を公表していくペースが歴史系とだいぶ違うということに大きなインパクトがありました。公共政策部門と公共哲学部門では、何かしらシンポジウムやワークショップをやって、そこから出てきたものをすぐに成果として出していくというサイクルができていますと感じました。それは、それまで私に関わってきた歴史学系の研究会とは違いました。歴史学系では、一旦置いて、そこからまた練り上げていくような、なるべく時間をかけて作るというような伝統というか習慣がありまして、このプロジェクトでのパブリッシュしていく回転の速さに衝撃を受けました。それは逆によかった点がありまして、そのような他分野の中での研究サイクルのスピードと自分の歴史系・経済史系のサイクルのスピードの違いを知ること、歴史系・経済史の中でもやはりそのように活字に残すということは非常に大事なことだという意識を強くもち、自分の頭の中やパブリッシュしない段階のものをあまりため込みすぎないようにになりました。研究や学会活動の中での研究成果の公表のペースやサイクル、やり方やノウハウというのは、やはりこの場にいたことでだいぶ鍛えられたと思っています。

#### 「対話研究会」

浅田：もうひとつインパクトがあったのは、倉阪先生の対話研究会の中で、法案をその場で作っていくという法案作成講座です。あれはなかなか私にとってインパクトがありました。時間を決めて集まり、1日の中で何かしらの成果ができるということが面白かったです。いま私は日本歴史学協会という歴史学系の学会連合の常任委員を務めていますが、私に関わった声明文のひとつに、国立国会図書館に対してデジタル化資料の公開範囲を広げてほしいという要望書があります。新型コロナ感染症が広がった時に、学生や研究者が図書館に行けなくなってしまった状況のなかで、いかに知的なデータベースにアクセスする環境を広げていくかということが問題になりました。やはり歴史家は文書館や

図書館に行かないと仕事ができないものなので、大学院生やポスドクの人たちの研究が滞ってしまうというのは非常に問題だと感じられました。

そこで、日本歴史学協会で国立国会図書館に対するデジタル化資料の公開範囲の拡大を求める声明を作ることになりました。その際、倉阪先生がやっていらした、1日でとにかく作るという方式をイメージしながら、オンラインでとにかく1日で文案を作りました。結局その後、最終的にはチェックで3~4日間、その後委員会での承認を取るというプロセスは経りましたが、そのようなかたちで、新型コロナ感染症への対応で非常に大変な時期に、何とか声明を出すことができました。その取り組みは、今、各学会誌のデジタル化とインターネット公開が国立国会図書館の通常業務の中に組み込まれることにつながりました。国立国会図書館では、最新号から5年間待つ必要がありますが、学会より希望があれば、公開する枠組みができています。それが実現可能であるとイメージができたのは、こちらのCOEでの経験があったからこそと思っています。

宮崎：それはすごいですね。進行の仕方も影響を受けることがあります。大学人や研究者としてやっていくというのは単に研究だけをしていけばよいのではないので、そのような仕事のやり方に影響を受けたというのは、ひとつ大きな点なのでしょう。

私自身は、もともと学部時から実は公共政策と公共哲学は架橋できないかと考えていまして、学部時代のゼミは公共政策研究で行政学の先生についていましたので、もともと分野横断的なことに関心がありました。この枠組みに入ることができたこと自体が私にとってはやはりうれしいことでしたし、その中で角田さんともご一緒しました補完性原理のプロジェクト(第4巻第1号(2007年6月)特集/「場所の感覚」と補完性原理)はなかなかおもしろかったです。残念ながら科研費にはつながりませんでしたが、あのプロジェクトはかなり分野横断的にできたのではないかと思います。私の研究成果のなかでも補完性の研究の評判がとてよくて、行政学のテキスト(『コレク行政学』成文堂)にも少し入れさせていただきましたが、「補完性の原理の説明があんなにわかりやすいのは初めてだ」とお褒めいただいたくらいでした。個人的なことですが、こ

のような枠組みができたというのは、とてもありがたいことであったと思っています。

それとともに、今、浅田さんが公共哲学と公共政策の速さということをおっしゃいましたが、本当は哲学分野もそんなに速くはないですけどものですが。

**角田：**『公共研究』は初めの方は、1年に何号出していましたか？という話ですよ。2～3号分の企画を同時に進行していくような感じで、小原清香さん（事務補佐員）や鹿住大介さん（技術補佐員、現・島根大学大学教育センター准教授）がいなかったら、大変でした。

**宮崎：**今、1年に1回出すだけでも大変苦労しているので（笑）、あれを4回も出していたわけですから、大変ですよ。それだけのコンテンツがあったとも言えるわけですが、浅田さんがおっしゃったように「対話研究会」という名称はなかなか良かったと思っています。今にして考えてみても、かなり画期的でもありました。実際には普通に研究会をして質疑応答をするスタイルで、さほど特別ではありませんが、しかし結果的に非常に分野横断的に、別に関心がなくても行かなくてはいけないという感じだったのが、逆にそれを知る機会になっていました。

**角田：**運営側にいればその場にいますし、専門の領域だけでなく、NGOの方も入った対話研究会もありましたので、そのあたりは他の研究会と全然違う感じで面白かったです。

**宮崎：**それも対話ということに含まれていますが、私たちのこのCOEプロジェクトでは、研究者だけの対話ではなく、一般の方々をととても大事にしていた点はやはり大事な点で、本当は公共哲学というのは、『シリーズ公共哲学』（全20巻、東京大学出版会）というのは全部研究者だけなのです。あれだけではやはり問題で、公共する哲学でなければいけないから、一般の人々とも公共するのが公共哲学のあり方だというので、それは確かにこのCOEプロジェクトで、特にその辺は公共政策部門が最も積極的に取り組んでいらしたので。

**角田：**環境ではむしろNGOの方が先行して政策を切り拓いたという部分が、特に日本の場合があります。行政が動かなかった、企業も全然動く気がない。で

も市民が自分たちでデータを取り、それを突き付けるといことをしていた。市民の方がよくわかっているというところがありましたので、そのように市民を入れているのが当たり前で、市民から学ぶことが必要であるという歴史があります。

宮崎：その辺りは本当に学ばせていただいたとか、正に公共哲学というのはこういうものだという学びを得たという感じがしました。そ



角田季美枝

れをやはりきちんと記録に残すこと、そしてそれを論文に仕上げていくというプロセスがあったこと、そのようなかたちで成果を出していくということが研究者としてやっていく上でとても大事なことで、私も未だに論文を書くのが好きではなくて面倒だと思うのですが、浅田さんが言われたようにかなり無理なペースであってもそれをやるのが非常に意義のあることになっている。ここで仕事のやり方も学ぶことができたということは、非常に大きなことだったのではないかと思います。

角田：私は『公共研究』に関わるまで大学の先生と関わったことがありませんでしたが、大学の先生ほど厄介な著者はいないということがよく分かりました。最後の最後まで赤を入れられるので、印刷屋さん泣かせです。

宮崎：その先生によってスタイルはありますけれども、でも私自身も最後まで修正を入れたい方ですが、そうでないと期限を切れない。研究は日々進展していきますし、書いていくうちに変わっていきます。講演の原稿なども事前に用意しますが、その原稿通りに読むことは全くなく、そこで話をしているうちに考えがまた進展していくので、原稿の内容を変えてしまいます。どこかの時間で区切らなければいけなかった。

#### 「記録を残す」こと

角田：記録に残すことは本当に大事。次の世代の研究者や市民に繋げるという

意味では、アーカイブもすごく大事なこと。今、川崎市の社会教育と関わって、ひしひしと実感しています。行政は公文書管理の規則を作っていて、重要なもの以外は残しません。だから市で作ったその当時の資料をどこに探しに行けばよいのかというと、公共の図書館かあるいは公文書館、国会図書館まで行かなくてはいけないので、残っているととてもありがたく感じます。

**宮崎：**国会図書館に残っているからいいでしょうというような感じだったのでしょうか。

**角田：**市としてはおそらく、紙媒体では保管スペースがないのと管理する人が大変であることもあり、WEBに移行していきますが、WEBもスタイルが更新されると前のものを閲覧できるのかという技術的な難しい問題があります。それでもたとえば10年間の会議の記録を残している自治体とそうでない自治体とでは雲泥の違いが出ていて、同じ政令指定都市でも全然違います。

**宮崎：**アーカイブというものは、歴史研究では本当に大事ですよ。

**浅田：**2023年も裁判所が重要な裁判資料を廃棄したということが問題になりましたが、公共研究において、オープンにしていく、つまり情報公開の問題と、資料を保存していくこと、さらにその資料を分類していき、何を保存して何をどのように歴史的に位置づけていくかということは、文書館員や歴史家の非常に重要な仕事だと考えています。

公文書の管理に関わる仕組みは、やはり民主主義的な社会にとっての重要な制度であると思っています。本来的には、角田さんがおっしゃったそのような資料は県であれば県の文書館に入れる、本当は公文書は全て文書館に入れるというのが大切であり、その全て入れる際にどのように整理していくかということについての専門的な知見をもつ専門家スタッフを養成する必要があります。アーキビストの養成が日本の場合は非常に脆弱であるという問題があります。きちんとした公文書管理の制度と専門的な知識をもった文書館員がいなければ、都合の悪いものはどんどんなくなってしまうような話がまかり通ってしまうということが現実として起きてしまいます。学生にも歴史学の意義や経済史の意義のひとつとしてそのような話を説明したりしています。

宮崎：ドイツはそのようなことは結構しっかりしていますよね。

浅田：基本的に史料は全て各自治体の文書館や州立文書館、あるいは連邦文書館に収められます。あとは個人のものに関してはどこに所蔵するかということが問題になりますが、個人の資料に関しても公立の文書館に収められるケースがあります。NGOの団体などの資料自分たちで非営利法人化などをして文書館を作るケースもあります。デジタル化もやはり今重要な手段となっており、デジタル化の際の著作権問題に関して、NGOの人たちが著作権をどのように理解すればよいかという議論も見られます。パンフレットを作り、自分たちが所蔵する資料が法的に問題なく活用されるように工夫する事例もあります。

宮崎：なるほど。ちなみに『公共研究』は、千葉大学のオンラインのアーカイブへのアクセス数がとにかく高かったというので、特にプロジェクトをやっていたときはものすごくアクセス数が圧倒的に多かったという話を聞きました。確かに私自身も『公共研究』の論文を見ましたということで、原稿依頼が来たということも実際にありました。その辺りの話は角田さん何かありますか。

角田：アクセス数が高かったということで、一度、一橋大学のシンポジウムのパネリストで呼ばれたことがあります。大学の図書館同士のアーカイブや紀要をどのように機関リポジトリとして残していくかというようなことで、各大学がやっている媒体の経験の話をしたことがあります。

宮崎：どのような話をされたのですか。

角田：その頃ちょうどリポジトリ登録という制度が広がり始めた頃で、リポジトリ登録をしていくということがまず重要であるということをどのように伝えていくのかということから始まり、という感じです。これも著者に同意書を書いてもらい、著作権の問題なども相談しながら、論文ごとに大学図書館でリポジトリ登録をしてもらうということにしました。

宮崎：今はそれが当たり前になっていますね。公開の時期もどんどん早くなっていて、この10年間くらいの進歩はすごいですね。

角田：以前はもっと早く公開してほしいと言われて、私が止めていたケース、つまり次の号の雑誌が出てからとか、せめて半年後と言ったことがありました。出

た2~3か月後にオープンにしてもよいのではないかという話もあったと思います。その辺は著作権の問題や著者とのやり取りもあるので、すぐには難しい方もいますという感じでやっていました。

宮崎：今は、そういうものはすぐに公開した方がいいですからと図書館から言われたこともありました。確かに私たちにとってもそうなのです。新しい成果はどんどん出していった方がいいと、その辺は随分と変わってきました。

角田：大学だけではないと思いますが、オープンにした方がいろいろな発展形が、本人だけではなく見えてくるし、作られるということがあるので、今は早くオープンにした方がいいかもしれません。

宮崎：その辺も随分時代が変わったという感じがしますし、随分隔世の感があるのですが、それを『公共研究』は先取りしていたというところがあるのではないかと思います。一般の人にも開かれている雑誌だということもあり、アクセス数も多く知られるきっかけになったのではないかと思います。

浅田：そのようなデータというか記録というか、その時期のアクセス数などのデータが残っていたら面白いですね。特に対話研究会の報告書のなかで何が関心を持たれていたのかが分かると、このプロジェクトの意義のひとつの証明になるかもしれません。

### プロジェクト後のキャリア

宮崎：5年間にわたってプロジェクトが行われ、これで一区切りになり、残念ながらグローバル COE には繋がりませんでした。倉阪秀史先生が学内のスタートアップ COE に採択され、その後継続的に JST RISTEX（国立研究開発法人科学技術振興機構の社会技術研究開発センター）、それから環境省の環境研究総合推進費に採択、現在はまた JST から予算をいただいています。また、学内の研究支援プログラムで、水島治郎先生が推進リーダーを務められる「公正社会研究の新展開」も活発に活動していて、2021年には『公正社会のビジョン』を明石書店より刊行されています。私はそれですと居残りまして、『公共研究』は続けさせていただいているというかたちになりますが、それぞれみな

さん COE プロジェクトが終わってから経緯があり今の仕事に就かれていますと思います。先ほど研究面などでプロジェクトに関わって影響を受けたことなどもお話をいただきましたが、プロジェクトが終わってからのことについて少しお話をいただければと思います。伊藤さんからお願いします。

**伊藤：**こちらの COE の時から ISO の学生さんの支援と国際規格を作る業務を5年間やっています、その後に環境マネジメント以外に機器装置用図記号の国際幹事を担当しました。国際標準化について学び実践経験をしましたので、それを活かして大学で標準化特に持続可能社会や SDGs を実現できるような標準を担う人材育成ということに力を入れています。

今日（本座談会当日）ビッグサイトでやっているのも国際標準を学んで、自分たちで教材を作って教えるということをしています。基本的にはルールを作るというところがベースですが、そういったものを支援することを実際にやっています。

千葉大学にいた時に自分が取り組んだことを今度は次の世代を育成するといったかたちで、あとは地元の企業の方々の支援をするということで、今研究と活動を一緒に行っているような感じです。

**浅田：**私の最初のプロジェクト・リーダーは両宮昭彦先生でしたが、首都大学東京に移られまして、現在の名称は都立大学になっていますが、その後にそこで助教の募集があり、首都大学東京に移動しました。助教は三年任期だったのですが、その間で博士論文を本にすることができました。その成果もあって、駒澤大学の講師に採用され、現在も駒澤大学にいるというかたちです。

やはり先ほどの実践の話のようなことに関わってきますが、こちらの『公共研究』で経験したことは、その後特に学会活動でいろいろと事務に携わることに繋がっている気がします。また、駒澤大学に勤めるようになってから、歴史学系での若手研究者問題を取り上げた論考を、千葉大学の崎山直樹さん（現・大学院国際学術研究院准教授）が『歴史学研究』に出したところがきっかけとなり、私も若手研究者問題コミットするようになりました。

さきほど述べた日本歴史学協会に、常設の委員会として若手研究者問題特別

委員会というものを作ってもらうことに関わりました。今その特別委員会の委員長になっていますが、いかにオープンにしながら進めていくか、非常勤講師やポストドクの人などと繋がりながら、学会のこの状況を改善していくか、ということ意識しながら活動していますが、それはやはり COE フェローでやってきた経験が活きていると思っています。

あとは、私に関わったものとしては、英語の“International Journal of Public Affairs”の最後の巻の編集を私が担当しました。3回の国際シンポジウムの運営に関わり、雨宮先生の時にはアーベルス・ハウザーさんと呼んで、その後、柳澤悠さんが企画した大きなシンポジウムと、秋元英一先生のアメリカのニュー・エコノミーをテーマとした国際シンポジウムの運営に携わりました。大きめの国際シンポジウムの運営に関わっていく経験は、今の学会の中でも生きています。私にとって、特に実践面で大きく鍛えられました。

学会の学際的な企画をやることも COE で経験をしました。特に面識のない方の中でも、たとえば弁護士の中野麻美さんを対話研究会に呼んだり、あるいはスウェーデンの福祉政策を専門とする宮寺由佳さんのような政治学系の人に依頼しました。そのような異分野交流のようなことを積極的に取り組むハードルも、やはり COE で経験したからこそ、自分自身のなかで低くなり、積極的に取り組むことができるようになりました。

宮崎：ありがとうございます。私の場合は、この COE の恩恵をとっても受けた人物だと思うのは、ひとつは『公共研究』には1年に1回ずつそれぞれ論文を掲載していただいて、それが結局博士論文に繋がるかたちになりましたし、その博士号はこのプロジェクトを基にしてできた博士（公共学）というものでした。私は論文博士の方の第1号となりましたが、非常にありがたいことです。また、私自身は公共哲学部門のスタッフでしたが、このプロジェクトで公共政策部門の倉阪先生と関わらせていただいたことをきっかけに、現在「未来ワークショップ」というものを全国各地で倉阪先生と一緒に開催しています。

それも単にご一緒したからではなく、「対話」を活かしたものをやりたいと倉阪先生がおっしゃられたのがきっかけです。このワークショップは原型は倉阪

先生の発案ですが、プロジェクトの「対話班」のセッションであった私がロジスティクスを担当して、設計や、効果測定、熟議のとはどのようなものかなどの意味付けをしています。

まさにこれはCOEなくしては生まれなかったであろうプロジェクトです。最初のワークショップは2015年に千葉県の市原市で行いまして、すでに10年に近づいてきています。特に種子島では6年にわたって毎年中高生ワークショップを開催していますので、とてもよい人材育成ができています。

種子島には大学がありませんので、大学進学で生徒たちは全国各地に行ってしまうのですが、やはり島のために何かをしたいということで学生団体を立ち上げまして、夏休みに島に帰ってきたときにさまざまな活動をしています。たとえば海岸の清掃をしたり、日常的にも進路相談に乗ってあげたりとか、また未来ワークショップのファシリテーターに加わっていただいたりとかたちで活動をしていて、非常によい人材育成を継続的にやっていくようになっていきます。

日本各地でみな地方の高校生は都会に行きたいという志向が強く、地方にはいろいろなものが足りないということを常に意識しているようですが、このワークショップに参加することで、地元への愛着が深まって自分が住んでいる地域のことを知らなかったことに気づき、むしろ大切にしなければいけないという意識が育っているように感じます。地元のことを考える、政治学的に言うと、やはり自分事として考えるということがきちんとできるようになっていて、やりがいのあるプロジェクトを継続的にやらせていただいています。

繰り返しになりますが、自分はずっと学部生の頃から政策と哲学とをなんとか結びつけてやることはできないかと考えていたので、今このようなかたちで結実しているのは本当にCOEなくしてはあり得なかったことだと思います。

公共学というのは、その中身もまだはっきりしていないとは思いますが、や



宮崎文彦

はり分野を超えるというのはまだなかなか難しいことでもあります。やはりどこかに軸足を置いてやらなくてはいけないことなので、私自身は公共哲学、哲学をやっている人間だと思いますが、最近では日本行政学会で発表したり、来年も公共政策学会で特集の記事もお誘いをいただき、むしろ実践の方で書いていただきたいという依頼が来るということになり、ありがたかったと思っています。

**角田**：私は、社会人で大学院に入院しているので、まずアカデミックなスタイルを身につけたり、知識などを理解するのにとても大変でした。COEに入ったことで、専門の環境だけではなく、歴史も哲学も行政もすべて学ぶ必要がありました。特に、雑誌の編集はすべて読まなくてはなりませんので、とてもよい経験をさせていただきました。それがいつか花開くといいなと思っております。どのみち私は実践から学の方へ来ましたので、まだ学の方のスタイルが分かっていないところはありますが。

特に私とよく話をしてくれたのは吉永明弘さん(公共哲学部門 COE フェロー)で、自然環境というところでは、原生自然のようなところを日本でもありがたがる場所があります。でも、都市でも自然はあるでしょう、都市と自然は二項対立ではないということを環境倫理の面からも国際的な文献をすごく読み解き、わかりやすい日本語で書いてくれている方がいて本当によかったです。

また、浅田さんには専門は環境ではなくてもドイツの歴史を知っていらっしやるので、ドイツはなぜ環境政策が進んでいるのかとてもよくわかっていらして、立ち話くらいのおしゃべりでしたが、お話していただいた事が、単に文字を読むだけではない文脈を理解することにつながりました。COE の研究員の方々や分野の第一人者である先生方、例えばオランダなら水島治郎先生、EU なら小川哲生先生、哲学なら小林正弥先生がいてと、本当にすごい面々でやっていたのだとわかります。

現在、研究は家庭の事情でできていませんが、教育としては都市の自然と流域を繋げて教えています。たとえば大正大学の非常勤講師でグリーンインフラという科目を担当しているのですが、グリーンはスポットではなくネットワー

クで考えなくてははいけませんね、と、岸由二先生（慶應義塾大学名誉教授、生態学）の本なども使いながらやっていて、学生に本を読むだけでなく地図を作成させたりしています。なぜこんなことをしなくてははいけないのかと言いながらも楽しんでやっている学生がいますので、よかったと思っています。

最近では川崎市の社会教育に関わることが多く、それを通じて自治体とは一体何か、市民の自治とは一体何か、と思うことがとても多いです。自治体職員労働環境は全国的にとっても劣化していて、本当にブルシットジョブになっているのではないかと感じています。そして指定管理者制度がどんどん進んでいる感じがありますので、市民が本当に頑張らないと社会教育だけでなくまずいことになってきています。その時に何がいちばん参考になるのかということを考えてときに、やはり公共哲学の部門で論じていらっしゃるようなことではないだろうかということ、読み返しています。

『公共研究』に載っていることは、本に載る前のアイディアレベルのことを書いていただいたということで、原石的なとても話が多いです。本になっていることはそのことが洗練されて細分化されて特化しています。でもそこに実践がないと分かりづらいので、原点は何かを知りたい場合は、『公共研究』や『シリーズ 公共哲学』を読み直しています。これからも参考にさせていただきたいと思います。

### 大学教員の立場になって

宮崎：アカデミックな世界でポストを得ることだけが重要なことではないですし、むしろ角田さんの場合には、今いらっしゃるような現場が大事なところでしょう。

昨今、大学の授業はどんどん実践的な方へ向かっていますし、私自身もそうですが一方的な講義をするのではなく、何かしらアクティブラーニングやワークショップのようなことが求められています。その意味でも、角田さんはとても大事な仕事をされていると思います。私自身も、ワークショップをしたり授業も対話型の授業で、学生にグループディスカッションをさせて、その報告を

聞いてレクチャーするというスタイルで、一方的な講義は全くしていません。それらも COE の成果だったのではいかと思います。

**伊藤**：私の授業も私自身が話をするのはとても少なく、ほとんどアクティブラーニングで実践型です。学生から学ぶこともたくさんあります。若いアイデアがたくさん出て来ます。COE でやられていた対話研究会のやり方からもいろいろと学びました。一方的に話すのではなく、若い人と交流したいですし、いろいろな意見を踏まえて、そして大学を越えていろいろな人たちと交流し連携してパートナーシップを結んで SDGs を実践していくことが大事だと思います。

**宮崎**：先ほど角田さんもおっしゃっていた立ち話的に聴くということで、文脈が分かるというのが大事ですね。やはり本という活字になっているとその辺りの背景が分かりにくいことが、立ち話や研究会レベルの発表だとよく分かる。それが実は大事なことだと思います。成果を出して活字にしていくことももちろん大事ですが、その間の経過もある意味で『公共研究』を通じて出せたと思いますし、シンポジウムの記録なども質疑応答なども含めてよく残しました。私は公共哲学シリーズに関わったこともあり、いまだにあのスタイルはとても大事なことだと思っています。歴史学では授業はなかなかアクティブラーニングにするのは難しかもしれませんが、浅田さんはいかがでしょう。

**浅田**：そういうことをやっている方もいらっしゃいますが、私の経済史の講義ですと 200 人から 400 人の受講者がいますので、アクティブラーニングは難しいです。新入生セミナーやゼミではやはりグループワークを中心にしています。ひと学年のゼミの人数を基本的に上限 16 人とし、3~4 人でグループを作ってもらい、テーマをそれぞれに考え討論し、発表してもらうようにしています。ノウハウ的なものは COE の経験もあって、すんなり入れている気がします。身近な知り合いからもグループワークはどうすればいいのかという話も聞きます。授業にグループワークを取り入れるハードルが低くなりました。COE での経験は大きかったと思います。

**伊藤**：分野が違うだけだなということもありましたが、今になって考えるとそこでいろいろなことを勉強したと思います。SDGs には全ての分野入ってい

ますので、いろいろな経験が活きています。

角田：SDGsはひとつずつやってもいいとなっているところがちょっと。どれでもいい、全部やらなくてもいいという風潮は……。

宮崎：SDGsは本来の目的としては、どれかひとつではだめですよ。

角田：いいところどりでだめなのです。トレードオフになるような目標があるので、その辺をどうするかというところで、パートナーシップとか質の良い学びというのが出てくるわけです。

宮崎：COEは、いろいろな面で先取りしていましたね。だからこそ今私たちのそれぞれの分野でそれぞれ活きているのではないかと考えています。大体一通りお話が聞けた感じがありますが、皆さんの方から何かありますか。

#### 「公共学専攻」設置

浅田：COEから離れてしばらくの間、振り返っていなかったのですが、COEが終わった後のこの中で何か変化があったとか、あるいは私たちがやっていた頃と現在の公共研究センターの違いとかをこのようなところで発見したとか、そのようなポイントがあれば知りたいです。

角田：環境と福祉の統合とか哲学と政策の連携が、公共研究センターなり千葉大学の学科編成・授業科目などに活かされたということがありますか。

宮崎：公共学専攻ができたのは間違いなくそうで、大きなことだと思います。しかしどちらかというとかたちだけかもしれません。

角田：学問レベルの専門性はなかなか超えづらいということがありますか。

宮崎：超えづらいというよりは、やはり先生方がみんな忙しいというのが正直なところではないかという気がします。風通しはよくなったのではという印象はあります。

角田：学生同士が他の学科専攻の学生と一緒に交流するとかゼミをするということができやすくなるといいですね。

宮崎：その枠組みは公共学専攻というかたちで出来たでしょうし、学生が学ぶ環境としてはおそらくよくなったのではないかと思います。いかんせん先生

方がみなさん忙しすぎるということが最も大きなことではないかと思います。

**角田**：忙しすぎる原因は何ですか。たとえば自治体であれば、人口が減っていくと税収も減るので国から小さな政府にするように言われていて、人減らしされていることがありますが、大学はどんな感じですか。

**宮崎**：それぞれの先生ごとに違いますが、大学の行政的にかなり忙しくなっているというのが最も大きいのではないかと思います。さまざまな改革を求められたり、成果を求められたり、大学として対応すべきことがとても増えているというのがあると思います。

それぞれみなさん大学に所属されていますので、お分かりかと思いますが、やはり大学を取り巻く研究環境というか労働環境は悪くなる一方ですよね。だからこそ私はどちらかという自身でも研究者としてやっていますが、補佐的なサポートをする人間がいないとやっていけないのではないかと考えています。教員個人が何かしらの外部資金のプロジェクトをとってきて個人でやっていくのはどうしても限界があるので、研究員や助教・助手のような COE のときの私たちのような存在が必要であると思います。他の COE からスタッフが多すぎる、人件費が高すぎると言われていたようですが、やはり人件費が無くては運営できませんし成果も出せません。かつこのように次の世代を育てることができなくなるのではないのでしょうか。

### 若手研究者を育てる環境

**角田**：時間がかかりますよね。

**宮崎**：その意味で、人材をきちんと育成していくことをやっていかないとどんどん大学や研究の世界は先細りしていくと思います。先ほど浅田さんも歴史学の方で若手研究者問題の話をしていらっしゃいましたが、そのようなことをやっていかないとどんどん先細りしますし、既に手遅れになっている感すらあります。

**角田**：千葉大レベルでは、ナショナルだけでなくグローバルに発信して受け入れる必要がありますね。

宮崎：酒井啓子先生がグローバル関係融合研究センターでその辺りを担っておられるのは重要かと思っています。浅田さんは先ほど既にお話されましたので、若手育成の有用性というのは単に若手の研究者がポストを得なくてはいけないということだけではなく、学問として育てていかななくてはいけないですね。

浅田：若手研究者問題は、10年前くらいはやはりポストの問題や研究環境の問題でしたが、ここ5年くらいはむしろ次世代の育成をしていかないと学界の底が抜けるような状態になっていると思います。

そうすると今度は大学院教育だけではなく、学部からもう一度作り直していかななくてはならないようになるのではないかと思うようになりました。そして今、それがもう手遅れかもしれないほどの危機的な状況ではないかと思っています。もう私たちの世代が作っていかなくてはいけないという意識をどれだけ共有していくのか。それは大学を越えてやっていく必要が本来あるはずですし、大学の種別を越えて取り組む必要があると思いますが、その連携をどのようにしていくのかというのは大きな問題だと思います。

現在、私は日本学術会議の連携会員になっていますが、あのような組織になると難しくなります。というのも、なにしろ委員会を招集する予算が年に1回分しかありませんので、それで一体何ができるのかという感じですし、そうすると大学の枠組みを超えたところを含めてやっていかないといけませんし、大学の制度的枠組みだけでは、その辺りは難しいと感じています。大学を越えたかたちで、かつ専門性が失われないようなかたちでやっていく枠組みを考えなくてはいいないだろうと思っています。

やはり COE のシステムや制度設定にはいろいろな問題点はありますが、ただ育成という面ではこのような組織がなかったら、それはそれで大変なことになったと思います。COE がなくなった後、どのような制度的枠組みが今担っているのかということも非常に懸念しています。助教のようなポストが削減されるなか、任期付きであっても研究拠点を作り、フェローを雇用するというのはある程度の厚みを作ったとも思っています。それをグローバル COE のように、選別して数を減らしていくということで、全く厚みが失われていった気が

します。一定の厚みがないと学問は成り立たないはずだと思うのですが、振り返ってみると COE 拠点くらいの規模は私たちくらいの世代にとって重要な役割を果たしたのではないかと考えています。

**伊藤**：私たちの次の世代を育成していく必要がありますし、お話を聞いていて思ったのは、企業の中でも事業継承の問題があって、大学もそうだよなと思いました。

**角田**：企業は事業継承をしてくれないと、自分たちの利益が繋がらないから。自治体は本当にだめですよ。ジェネラリストを育てるということで人事異動を3年ごとにやって、専門職を図書館にも置かないなんて、なんなんだこれは！ということが20年以上続いています。劣化します。

**宮崎**：手を付けるのは大変ですが…。

**角田**：わかるんですが、なんとかそれをしないと新しい人と本当に蓄積すべき行政のノウハウ、大学としてのノウハウがなくなってしまう。公共研究センターだけで予算が採りにくいのであれば、他の大学と何か連携をしてプロジェクトをすとか、そのようなことを考えていかないとだめなのかもしれません。

### 学術学会の若手支援

**角田**：学会にはそのような人材育成や若手研究者問題に対応する機能はありませんか。

**宮崎**：若手に関することをやっている学会は結構あるかもしれません。公共政策学会は若手の発表の場でもありますし、そのような賞も出していたような気がします。行政学会も今はやっていたような、会員になった若い人たちを対象に奨励賞があったり、けっこうそのようなことをやるようになってきているかなという印象はあります。

**浅田**：私がかかわっている政治経済史学会でも、大学院生の会費を安くすることや、もちろん研究発表の場として自由論題報がありますが、面白い取り組みとして学会の前日に若手交流会を開催して、たとえば博士論文をどのように本として出版するかとか、英語の国際ジャーナルに出す際の注意点や学会誌に出

すときのポイントや査読はどのようなプロセスなのかなど、意見交換や情報交換の場がつくられています。

それはやはり重要ななと思っていて、つまり研究室で指導教員と折り合いがつかなくなった場合に、学会などで別の出会いを得る機会になったり、研究室で十分な情報を得られなくなったときに、学会で情報を得られることと大学を越えて人と出会える場があることは重要だと思います。

**角田**：非常勤も厳しいです。院生には補助制度がありますが、非常勤は会費を安くしてくれる学会とそうでない学会があるので、博士号を取ったが正規雇用の教員になれない人の方が多いじゃないですか。学会費だけで結構な金額になります。

**浅田**：大きなテーマの問題です。歴史学研究会の会員を見たときに、大学院生と非常勤講師の数は、全体の母数から見たらその部分の会費を安くしても問題ないはずですが。歴史学研究会の場合は、大学教員か高校の教員が多くて、実際の比率からしたら院生や非常勤の人は少ないです。大学院生だけでなく非常勤講師も含めて補助すべきという合意が少しずつできてきていますが、まだもう少しその意識を強めていく必要があるだろうと思っています。

**角田**：あと、女性の研究者に対しては子連れで来ていいよという配慮を環境社会学会ではやっています。

**宮崎**：託児所サービスなどが行われるようになってきていますね。

**浅田**：政治経済学経済史学会の場合で、なるほどなと思ったのは、地方の大学で開催する際に託児サービスを提供するのですが、大学で託児サービスを持つというより預けるときの費用を学会が負担します、という両方を行っています。結局、誰が子供を見てくれるのか、それが専門のスタッフなのか、あるいは専門のスタッフに依頼する場合に、利用人数が一定以上でないと支払いが上手くいかないとかいろいろな問題が出てきます。ですから、学会の方で費用を補填しますので、該当の方は申請してください、という方式はなるほどと思いました。

**宮崎**：学会としてもやりやすいでしょうし、フルサポートしなくていいですし、

なるほど。

角田：この分野がいちばんジェンダー対応には疎いかもかもしれません。

伊藤：女性研究者が少ないですね。

角田：理系は少ないことがよく知られていますが、社会科学や人文系でも多いかというところでもないですね。

宮崎：今そもそも院生の数も減ってますもんね。自分もあまり推奨しませんが、勝手に育ってくれるのは全然かまわなくて、私の教え子もひとり今年度からある国立大学でポストを得ました。今だんだんポストが空いてきているので、若手がポストに就けるようになってきているようにもします。

いずれにしても本当にまともに人材育成をしないと、どこも大変なことになりますよね。もうわれわれもそういうことをしなくてはいけない年齢や立場になったというのが、今回このような座談会をやった意味でもあるかもしれません。

伊藤：この機会があったのでみなさんと久しぶりにお会いできて、よかったです。

宮崎：では、みなさんありがとうございました。

\*この座談会は 2023 年 12 月 8 日に東京ビッグサイト内で行われた（浅田のみオンライン参加）。

（あさだ しんじ）

（いとう かよ）

（つのだ きみえ）

（みやざき ふみひこ）